

埃被った家具によって封鎖されていた祖父の部屋に僕は入り込んだ。部屋の中も埃まみれであったが、さっぱりとしたレイアウトの部屋であった。本棚と机と椅子しか見当たらない。四方を覆いつくす本棚には、分厚い本がぎっしりと並んでいる。縦にも横にも隙間なく詰め込まれているので、死番虫による食害はなさそうだ。外国書がほとんどで、見たところアジア系の国の本が多い。日本語の本を一冊見つけた。東洋の呪術体系の源流……よく見たらその筆者は祖父自身だ。重たそうな本を、詰め込まれている中から抜き出す気にはならず、本棚の隙間に置かれている机を物色していた僕は、その引き出しの中に一冊のノートを見つけた。横書きを想定されている様だが、縦書きで書かれている。

日本語で書かれている。なかなか癖の強い手書きだ。今は亡き祖父についてあまり詳しく知らない僕であるが、癖の強い人格を持っていたであろうことは容易に想像でき

た。表紙の裏の下側の、最初の一ページを読み始めた。

太陽が海に沈み、人は夢を見る。弱った光は深海の暗闇を仄かに照らす。夢とは純粹に無意識の光景である。太陽が海から昇るその瞬間、神秘的で美しい世界が開かれる。人は半ば無意識でありながら、半ば覚醒している。

普遍的な心象であるほど想起しにくいというのなら、海は垂直に上に行くほど個別的であり、下に行くほど普遍的である。最下部、普遍的無意識のさらにその先に、精神を超越した実在がある。太陽の認識の光がそこに届くことはあり得ない。しかし、太陽が海に深く沈む間、それは可能となる。太陽が二つあれば故意にそこに到達できる。私は主人格の主導権をタルパに授け、私自信を第二人格として海の底まで沈めた。そこで私は何か偉大な者と出会った。

何か偉大な者は、言語のような何かを私に伝えた。私はそれが何であるかを自然に理解することができた。それは全ての人間に普遍的な実在、アカシックレコードであった。

普遍的無意識の深みの果て、観念と自然の境界に神は息を潜める。境界にいるため観念と自然の両方の属性を持つが、そのどちらにも帰属しない。神によつて両義性を付与された一つの存在、それこそが真実を記述する神の言語、アカシックレコードである。それは人間にのみ見える幻想であるが、人による観測の前から意味を持つ。アカシックレコードという言葉の文字は深層領域に眠る普遍心象群のままの姿である。アカシックレコードの文字列は、それを見た者の心に深く入り込み、相応する心象を強制的に覚醒させる。かくして表された記述は真実と化す。

魔法とは、自然世界における因果関係の不条理ではなく、観念世界における認識の歪みである。アカシックレ

コードの記述により人の心を操る者、それが魔術師なのだ。

次のページからノートの終わりまでは、日本語ではない謎の文字列が始終続く。アラビア数字の「4」と「8」に似た文字がところどころあるというだけで、それ以外は全く見たこともない文字だ。当然、僕に読めるはずもない。ノートを元の位置に戻して、部屋を出た。

目覚まし時計が鳴る二十分前には、僕は既に目を覚ましている。いつものように眠りから覚めようというその時、脳裏に謎の文字列が表象した。昨日祖父の部屋で見つけたノートに書かれていたあの文字列なのだと思いついた瞬間、僕は自分の思考の流れの中に異物があるかのような違和感を覚えた。その正体は、僕ではない何者かの思考、そしてその読み上げ。

何者かは名乗った。それは祖父の名前と同じであった。